

国語

注意

- 1 問題は **1** から **5** までで、17ページにわたって印刷してあります。  
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、  
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のA・I・U・Eのうちから、最も適切なものを  
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、  
。や「などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えは解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 潮が干ると暗礁が見える。
- (2) 彼は崇高な精神の持ち主だ。
- (3) 腰の鈍痛が治った。
- (4) 大臣が更迭される。
- (5) いつでも率先垂範をこころがける。

2

次の各文の――を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 初日の出をオガむ。
- (2) 工場のソウギョウ時間を短縮した。
- (3) 歴史の学習のために城下町をタンボウした。
- (4) 彼はカタイジなどところがある。
- (5) たくさんの人から助言をもらいタキボウヨウになってしまう。

次の文章は、大正、昭和の作家、宮本百合子が自身の幼少期を回想して書いた文章である。これを読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。)

空が荒模様になり、不機嫌な風がザワザワ葉を鳴らし出すと、私の内にある未開な原始的な何ものかが不可抗の力で呼びさまされる。(1) 凝つと机について知らぬ振などしていられない。私はきつと梢の見えるところまで出かけ、空を眺め、風に吹かれ、痛快なおどろきとこわさを一心に吸い込もうとする。今日も、椽側の硝子をすかし、眼を細くして外界の荒れを見物しているうちに、ふと、子供の時のことを思い出した。

子供というものはいつも珍しいことが好きなものだ。晴れた日が続く、一日、目がさめて雨が降っているのを知ると、どんなにそれが珍しく、嬉しく素敵なことか!

「ああ雨が降ってる!」

と心に叫ぶ時のわくわくする亢奮を、今も尙鮮かに思い出せるが——然し、子供の時分雨が降ると何故あんなに家じゅう薄暗くなっただろう。部屋の中で座布団をぶつけ合つて騒ぐ。或はもう少しおとなしい子供らしく静かに電車ごっこでもする。遊びはいつもの遊びなのだが何だか部屋の間々が暗く、物の陰翳が深く、様子が違う。その何だか違う感じすみずみが小さい子の感情を限りなく魅する。ちよっぴりこわいようでもある。珍しいものはいつだって少しはこわいところもある——それを子供はよく知っている。その感じを更に強め享樂するために、私は机だの小屏風だのを持ち出して、薄暗い隅に一層暗い囲いを拵えた。すっかり囲つて狭い一方だけが開いている。そこが洞の出入口だ。私は一人の母で小さい息子とそこに隠れている。何から?——シッ! そんな大きい声を出してはいけない、この山には虎がいるのだ。虎がきくではないか。ほ

ら、もう唸り声をする。洞のつい入口まで来た。ウオー、ウオー、美味そうな子を入口の幅が狭いため食えないのを怒って彼は盛に唸りつと嗅ぎ廻る。(2) 私は段々本気になり、抱いている子に「大丈夫よ、大丈夫よ」と囁く。太ったもう一人の弟は被った羽織の下で四足で這いながら自分が本当の虎になったような威力に快く酔う。

そんなことをして遊ぶ部屋の端が、一畳板敷になっていた。三尺の窓が低く明いている。壁によせて長火鉢が置いてあるが、小さい子が三人並ぶゆとりはたつぷりある。柿の花が散る頃だ。雨は屢々降つたと思う。(3) 余り降られると、子供等の心にも湿つぽさが沁みて来る。ほんやり格子に額を押しつけて、雨水に浮く柿の花を見ている。いつまでも雨が降り、いつまでも沢山の壺のような柿の花が漂っているから、子供達もいつまでもそれを見ている。風がパラパラと雨を葉に散らす。浅い池のような水の面に一つ、二つ、あとつづけてまた柿の花がこぼれる。一つの花からスーと波紋がひろがる。これらの花からもスーと。二つの波紋がひよつと触り合つて、とけ合つて、一緒に前より大きくひろがって行く。水の独樂、音のしない独樂。一心に眺め入っている子供の心はひき込まれ、波紋と一緒にぼうつとひろがる。何処かわからないところへいい気持ちにひろがって行ってしまう。——水だつて子供だつて何処へひろがるのか、何のためにひろがるか知りはない。子供はそのままいつか眠る。

窓のあるその部屋と、台所の方は——客間や玄関を引くるめて——別々の翼であった。二つの翼は廊下でつながれている。間に、長方形の空地があつた。その空地は、家々が茅屋根をいただいていた時分でなければいような種類の空地であった。三方建物の羽目でふさがれ、一方だけ、裏庭につづいている。裏庭と畑とは木戸と竹垣で仕切られている。

その時分、うちは樹木が多く、鄙びていた。客間の庭には松や梅、美しい馬酔木、榧、木賊など茂って、飛石のところには羊歯が生えていた。子供の遊ぶ部屋の前には大きい半分埋まった石、その石をかくすように穂を出した薄、よく鉄砲虫退治に泥をこねたような薬をつけられていた沢山の楓、幾本もの椿、また山桜、青桐が王のように聳えている。畑にだって台所の傍にだって木のないところなど一つもなかった。木が生えていなければ、きつと青々草が生えて地面を被うている。それなのに、たった一箇所、雑草も生えていなければ木もなくむき出しのところがあった。それは例の、三方羽目に塞がれた空地だ。(4) そののがらんとした寂しい地面の有様が子供の心をつよく動かした。何故こだけこんな何もないのだろう。——或る日、子供は畑から青紫蘇の芽生えに違いないと鑑定をつけた草を十二本抜いて来た。それから、その空地のちようと真中ほどの場所を選んで十二の穴を掘った。十二の穴がちやんと同じような間を置いて、縦に三つ、横に四側並ぶようにと、どんなに熱心に竹の棒で泥をほじくり廻しただろう！ 根が入る位の大きさに穴が出来ると、一本ずつ青紫蘇に違いない木を植え込んだ。さあ、これで花壇が出来上った。——得意なのは子供ばかりではなかった。誰からも忘れられていたような空地も、その花も咲かないひよろひよろした花壇を貰って嬉しがっているようであった。

ところが二日ばかりすると、雨の日になった。きつい雨で、見ていると大事な空地の花壇の青紫蘇がびしびし雨脚に打たれて撓う。そればかりか、力ある波紋を描きつつはけ道のない雨水が遂にその空地全体を池のようにしてしまった。こんもり高くして置いた青紫蘇の根元の土でさえ次第に流され、これは今にも倒れそうに傾きかけるものさえ出て来た。——

\* 私は小さい番傘をさし、裸足でザブザブ水を涉り花壇へ行つて見た。保修工事が焦眉の問題であった。私は苦心して手頃な石ころを一杯拾っ

て来た。傘は夙に放り出し、土の流れを防ごうとして、一本一本根の囲りをこの小石で取繞んだ。が、瞬く間に情なしの広い空地の水は石をも越した。石ころも、根も水づかりだ。葉は益々悲しげに震える。心配ではち切れそうになった子供は、両手で番傘の柄を握り、哀れな彼等の上にそれをさしかけた。しつきりなく傘を打って降る雨の音、自分はずぶ濡れになる気持、部屋の中で小さい弟が駆け廻るドタドタいうこもった音。(5) 自分も一本草のように戦きながらそれ等を聴き感じ子供は久しく立っていた。

(宮本百合子「雨と子供」による)

〔注〕 亢奮——「興奮」に同じ。

長火鉢——長方形の箱型をした火鉢。

翼——建物などの左右に張り出した部分。

馬酔木——ツツジ科の常緑の大形低木。

榧——イチイ科の常緑針葉樹。

木賊——トクサ科の常緑性シダ植物。

鉄砲虫——カミキリムシの幼虫。

青桐——アオギリ科の落葉高木。

保修——「補修」に同じ。

〔問1〕<sup>(1)</sup> 凝つと机について知らぬ振などしていられない。とあるが、こ

のときの「私」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 子供だった頃に味わった荒天の日のおどろきとこわさを思い出そう  
と、じれったく思う様子。

イ 外界の風雨が強くなるにつれて大きくなってきた恐怖で、早く逃げ  
出したくなっている様子。

ウ 荒れ模様空によって生じた不可解な感情を気にしまいと、平静さ  
を保とうとしている様子。

エ 悪天候時の自然の荒々しさを一身に感じたいという気持ちがあ  
がり、落ち着かない様子。

〔問2〕<sup>(2)</sup> 私は段々本気になり、抱いている子に「大丈夫よ、大丈夫よ」

と囁く。とあるが、このときの「私」の様子として最も適切な

のは、次のうちではどれか。

ア 雨による薄暗さやそのこわさを使って、虎に狙われながら洞にいる  
という状況を想像して遊んでいるうちに興に乗り、一人の母親として  
子を慰めるという役になりきって楽しんでいる様子。

イ 雨による薄暗さを利用して作りだした、虎に狙われているという設  
定においてこわがる弟を励ますうちに、自分も実際に虎に襲われてい  
る気分になってしまつて弟と一緒に震えている様子。

ウ 雨の日のいつもとは違う薄暗さに対する違和感を更に強めるために  
屏風などを持ちだして遊んでいるうちに、本気になってしまった虎役  
の弟に対して、もう十分だとたしなめている様子。

エ 雨の日の薄暗さが子供心にこわいと感じながらも楽しい気持ちにな  
り、屏風などを持ちだして虎のいる洞の近くに我々がいるという状況  
を設定して、弟とこわさを味わいながら遊んでいる様子。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 余り降られると、子供等の心にも湿つぽさが沁みて来る。とあるが、このときの「子供等」の様子を表したものととして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 雨への興味も薄くなり、雨に打たれて頼りない様子の柿の花をしみじみと観察するようになり、自分たちの不明瞭な先行きを思つて閉塞的な感情になりやすくなっている様子。

イ 雨の楽しみにも飽き始め、柿の花が散る梅雨の時期特有の重苦しい景色をぼんやりと眺めるようになり、晴れ間のない日々を恨んで悲観的な思考に陥りやすくなっている様子。

ウ 雨の刺激にもすっかり慣れ、雨に降られている柿の花の様子を落ちついて見入るようになり、自分や自分たちをとりまく自然を巡つて観念的な思索に入りやすくなっている様子。

エ 雨の日の興奮も収まり、上から落ちる雨粒によって水平に広がる波紋を冷静に見るようになり、横に並ぶ弟たちの大切さを感じて感傷的な気持ちになりやすくなっている様子。

〔問4〕<sup>(4)</sup> そのがらんとした寂しい地面の有様が子供的心をつよく動かした。とあるが、このときの「子供」の気持ちを三十五字以上四十五字以内で説明せよ。

〔問5〕<sup>(5)</sup> 自分も一本草のように戦おのきながらそれ等を聴き感じ子供は久しく立っていた。とあるが、この理由として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 強い雨で流されそうになる青紫蘇の世話を懸命にしていたが、もはやなすすべもなく、自らの非力さを痛感したから。

イ 強い雨の中、必死に花壇の補修をしていたが、震える青紫蘇を見て子供の頃の雨の日を思い出してなつかしく感じたから。

ウ 強い雨の中、自分が青紫蘇の花壇を補修する一方で、家の中ではしゃぐ弟の無神経さにやり場のない怒りを覚えたから。

エ 強い雨で流されそうになる青紫蘇と違って、一人でもしっかり根を張って自立する存在であろうと、覚悟を決めたから。

〔問6〕 本文の表現について述べた説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 「ザワザワ」や「わくわく」、「ひよろひよろ」という擬音語、擬態語を使うことで、人為とは無関係に変化する自然に楽しみや恐れを敏感に感じとる作者の幼少期が繊細に描かれている。

イ 「馬酔木」や「榎」、「木賊」など具体的な植物名を一つ一つ詳しく列挙することで、自然が身近にある環境で自然に対して豊かな感受性を育んだ作者の幼少期が鮮明に描かれている。

ウ 「電車ごっこ」のような子供じみた言葉を用いる一方で「享楽」など子供にはなじみの薄い言葉を用いることで、幼いながらも思慮深かった作者の幼少期が印象的に描かれている。

エ 「少しはこわいところもある——それを子供はよく知っている」のように「——」という記号をいたるところで使用することで、現在と過去の時間軸が巧みに混じり合う世界観が象徴的に描かれている。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。( \* 印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

ICTの発展によって、映像や音楽などのコンテンツの制作も以前に比べてはるかに容易になった。今や専用のスタジオに行くことなしに、自宅のPCで十分な質のものを個人で制作・編集することができる。制作のためのソフトウェアも発達しており、専門的な知識がなくとも様々なものを作ることができる。また、そうして制作されたコンテンツを個人が発信することも非常に容易になっている。個人のPCやスマホから動画共有サイトやSNSなどを通して、動画・音楽・写真などのコンテンツを一瞬で世界中の人間がアクセス可能な状態にすることができる。かつてのように、テープやCD・ROMなどを制作・販売することもはや必要ではない。

こうしたメディア環境が実現されていけば、それまでよりもはるかに多様なコンテンツが次々に発信され、技術のさらなる発展とともに芸術や文化もさぞや発展しているものと期待したいところである。しかし、現在のところインターネット世界はそれほど創造的で多様なコンテンツに溢れ返っているわけではないように見える。それどころかむしろ、<sup>(1)</sup>数あるコンテンツは次第に画一化されていっており、それらを視聴する側の人々もそのことを望んでいるようにさえ見える。

インターネット世界におけるコンテンツが画一化されていく背景には、資本主義の原理が働いている。資本主義システムのもとでは芸術や文化などの自己表現も商品として扱われる。ここでは本当の意味での自由な制作は可能ではなく、売ることのできるもの、商品価値が高いものが優先して作られる。インターネット世界では映像や音楽などが無料で配信されることも多いが、それでも資本主義の原理から逃れられるわけではない。なぜなら、そうした配信サイトやSNSには広告がつけられているからである。つまり、どれだけ多くの視聴者に広告を見せることができるか、とい

うことがインターネット世界における主要な価値基準なのである。現在のコンテンツの制作においてこうした価値基準を無視することは難しい。より多くの視聴者やフォロワーを獲得できるもの、言い換えればできるだけ多くの人の興味を引くものが、価値の高いコンテンツと見なされる。伝統的な価値のポストモダンの無力化は、マーケティングの手法を通して、価値の大衆化へとつながっている。またそうした中で、自らが手っ取り早く視聴者を獲得するために、すでに多くの視聴者を獲得している別のコンテンツを模倣することが有効であると一たび気づかれると、コンテンツの画一化は進行の度合いを増していく。

こうした状況がいつそう深刻なのは、インターネットのテクノロジーが画一的なコンテンツを望むように個人を導いているという点である。インターネットの利用者は基本的に検索システムで上位に挙げられるコンテンツや情報にのみアクセスする。検索の上位に挙げられてくるものは、より多くの者からのアクセスを受けたコンテンツか、その利用者が以前にアクセスしたものに似たコンテンツである。それゆえ、利用者である個人は、多くの他者と同一の経験をするか、以前の自分と同様の経験を繰り返すことになる。<sup>(2)</sup>ここでは個人の経験は、当のコンテンツの再生回数の多さによってか、あるいはビッグ・データに基づくマーケティングシステムによってそれぞれの視聴者が該当すると判定された類型によって規定されることになる。<sup>(3)</sup>それゆえ人々は、本来ならばインターネット世界にはそれ以前の世界よりもはるかに多くの選択肢があるにもかかわらず、画一化あるいは類型化されたコンテンツを自ら選択するようになるのである。

かくして現代のインターネット世界では、テクノロジーの発展とメディアの転換によって、人間の経験はより豊かなものになるどころか、かえって画一的な貧しいものになってしまう。こうした〈経験の貧困〉が世界の至るところで生じている。<sup>(3)</sup>同時にこうした事態は、様々な経験を通して形成されてくる人間の自己のあり方にも大きな影響を及ぼすことになる。



インターネットの登場以前から、テレビなどの聴覚的・触覚的メディアはマーケティングの手法によって、各人の感性や欲望の特異性を減衰させ、経験を画一化させてしまった。<sup>\*</sup>ステイグレルは、そのことが「特異的な存在」あるいは「唯一の存在としての自己」への愛を失わせてしまっていると指摘している。彼の指摘に従えば、現代の新しいメディアにおける（経験の貧困）は、自己の喪失を生んでいる（これをステイグレルは「象徴の貧困」と呼ぶ）。さらにステイグレルは、この自己への愛は人間が他者と友愛を結び、社会を構築する上で不可欠なものであるとしている。なぜなら、特異性に基づく自己への愛は、その自己をして、自らと異なる者を外部に置き、自己と共通性を持つ者（友人）たちとともに一なる共同体を構成させるものだからである。自他が相互に結びつき、社会を構築していくためには、まずは自己への愛とそれに基づく他者（友人）への愛が必要である。しかし、（経験の貧困）によって自己への愛は生じなくなり、共同体における政治が根本的に不可能となってしまう。経験の画一化によって共同体を持つことのできない現在の我々は、ある種の「戦争状態」にあり、「あらゆる理由において人間であることを恥ずかしく思っている」とステイグレルは嘆いている。

このような自己の喪失とそれに伴う友愛の不可能性という問題は、現代の主要メディアであるインターネットにおいていつそうはつきりと現れているように見える。コミュニケーションの基礎となる自己を形成し愛することができない人々は、他者を愛し他者に配慮することもできず、他者を理解しようとするともなく、時には（フェイクニュース）によって他者を欺き傷つけることを厭わなくなってしまう。

このような他者への暴力性は、自己を喪失してしまった人間がインターネットによって、それまでよりもはるかに多くの他者と、はるかに近い距離で生きるようになったこと<sup>\*</sup>でいつそう顕著になっている。インターネットはマクルーハンの時代よりもいつそう容易に「グローバル・ヴィレッジ」

を形成させる。確かにインターネットを通すことによって、世界中のあらゆる他者が身近に存在し、彼らと相互的な関係を結ぶことが可能になる。<sup>(4)</sup>しかし現代の人間が他者を愛することをできなくなっているのであれば、そうした急激な距離の縮減はかえって人間の心のうちに煩わしさと憎しみを生むものになってしまう。

晩年のマクルーハンは世界の急速な「グローバル・ヴィレッジ」化の危険性を予見していた。新しいテクノロジは我々を、今までのやり方が通じないフロンティアに置く。彼はテレビでのインタヴューで次のように語っている。「フロンティアを生き抜くとき、あなたにアイデンティティはありません。……あなたは何者でもありません。……自分が特別な存在であると、力で証明する必要があります。だから暴力的になるのです」。この暴力性のゆえに人々の間にはある程度の距離が必要となってくる、とマクルーハンは警告している。

一般に人間の間の対立は、互いが持っている情報、考え方、価値観の相違によって生じるものと考えられている。<sup>(5)</sup>それゆえ、インターネットの開発者たちはマクルーハンの警告にもかかわらず「グローバル・ヴィレッジ」をユートピア的に理解していた。インターネットによって、技術的には世界中の人間が同様の情報を受け取ることが可能となる。同じ情報に基づいて考え、物理的な距離を越えて対話することで同じ価値を共有できるようにすることが期待されたのである。しかしそうしたユートピアは、少なくとも今のところは実現していない。むしろ、新しいメディアを通して（経験の貧困）が深刻なものとなり、人間がそれまでのように自己を確立することができなくなったこと<sup>(6)</sup>で、「人間の野蛮化」が生じてしまったのである。

インターネットを通して人間に与えられたのは、膨大な情報量が多すぎる過負荷とグローバルな規模の接続性である。それまでの人間は限られた情報を基に考え、空間的に接近している他の人間と共同体を構築し、その

中での対話を通して一定の価値を共有してきた。そこでは、あらかじめ考えの異なった者同士でも近い距離にいたのであれば、共存していくために考えをすり合わせ、共有可能な価値を生み出していかなければならなかったはずである。もちろん歴史的には、それが対等な対話に基づかなかつた例も無数にあったことだろう。一部の人々の考え方が支配的となって他の人々の考え方を抑圧したこともあっただろうし、一部の人々が共同体から排除されたこともあっただろう。それでも共同体が構築され存続しえたところでは、そこで共有される何らかの価値を見出<sup>みだ</sup>そうと努めなければならなかったはずである。そうした時代には、人々の空間的な近さは彼らの共存と価値共有への要求につながっていた。

それに対して、現在の人間はメディアの劇的な転換によって、前触れもなく唐突に情報の大波に飲み込まれてしまっている。人間は膨大な情報の渦の中で、それまでのように空間的に近くにいる人々との間で苦勞して共同体を構築していこうとは思わなくなる。インターネット上では自らと同じ考えを持ち、自らを安心させてくれる者をいつでも容易に見つけることができる。その中では同時に、自らと異なる考えの持ち主を強く拒絶することも容易になる。そうした者との対話に努めなくとも、価値を共有できる仲間は十分にいるのだから。

(濱良祐「曲がり角の向こう」による)

〔注〕 ステイグレール——フランスの哲学者(一九五二年—二〇二〇年)。

マクルーハン——カナダの批評家(一九一一年—一九八〇年)。

グローバル・ヴィレッジ——電子的なメディアによって、世界

規模での交流を行うことができるよ

うになることを「世界村」として比

喩的に表現したもの。

〔問1〕

(1) 数あるコンテンツは次第に画一化されていっておりとあるが、「数あるコンテンツ」が「次第に画一化されて」しまうのはなぜか。八十字以上百字以内で説明せよ。

〔問2〕<sup>(2)</sup> それゆえ人々は、本来ならばインターネット世界にはそれ以前の世界よりもはるかに多くの選択肢があるにもかかわらず、画一的あるいは類型化されたコンテンツを自ら選択するようになるのである。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア インターネット上では、通時的に蓄積したコンテンツから自身に最適なものを探し出すのは難しく、利用者はテクノロジーの力を借り、必要なものだけにアクセスするようになっていくということ。
- イ インターネット空間において、利用者は自分の趣向に合わないコンテンツを拒絶することで、大衆的評価が確立したのか、自身の経験に則したものだけを利用するようになっていくということ。
- ウ テクノロジーの発展により、利用者は大衆の評価が高いものや、自身がかつて消費したものに似たコンテンツを消費するよう誘導され、限られたものだけを享受するようになっていくということ。
- エ テクノロジーの発展によって、利用者は多くの他者と共時的に関わっていくことが求められ、自身のこれまでの経験だけに縛られない、大衆的なコンテンツを積極的に選ぶようになっていくということ。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 同時にこうした事態は、様々な経験を通して形成されてくる人間の自己のあり方にも大きな影響を及ぼすことになる。とあるが、「人間の自己のあり方」がどうなっていくということか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 他者への働きかけなくして、自分一人で容易に自己の独創性を発信するようになっていくということ。
- イ 他者との協力を通してしか、共同体構築のために不可欠な自己愛を認知できなくなっていくということ。
- ウ 他者とは異なっており、特別な存在として認識されるべき自己が確立し得なくなっていくということ。
- エ 他者へ愛を表明することで、自己の特異性を獲得することに恥じらみを感じるようになっていくということ。

〔問4〕<sup>(4)</sup> しかし現代の人間が他者を愛することをできなくなっているの

であれば、そうした急激な距離の縮減はかえって人間の心のうち  
に煩わしさと憎しみを生むものになってしまう。とはどういうこ  
とか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 他者への配慮を欠いたまま多くの他者と関わりをもつことは、自己  
のアイデンティティを確立するための暴力性発揮の可能性を高めるも  
のになってしまふということ。

イ 自己の尊厳ばかりを保持したまま他者との友愛の関係を結ぶことは、  
他者との身体的な接触の機会が減少する状況において困難を極めるも  
のになってしまふということ。

ウ 他者への理解が不十分な状態のまま寄り添うべき他者の数が増加す  
ることは、共同体の構築が不可能であるというむなしさを感じさせる  
ものになってしまふということ。

エ 自己のアイデンティティを確立できないまま思いやりをもたずに多  
くの他者と対話を行うことは、自己の存在証明の機会を一層奪うもの  
になってしまふということ。

〔問5〕<sup>(5)</sup> それゆえ、インターネットの開発者たちはマクルーハンの警告

にもかかわらず「グローバル・ヴィレッジ」をユートピア的に理  
解していた。とあるが、「インターネットの開発者たち」は「グロー  
バル・ヴィレッジ」をどのように理解していたということか。次  
のうちから最も適切なものを選べ。

ア あらゆる考え方や価値観の相違がなくなることによって、個人間の  
対話が促進されるようになるため、世界中の人類が一定の価値を共有  
することができる。

イ 平等に同じ内容の情報を享受できるようになり、あらゆる人々が相  
互に関係を結ぶようになることで、人類が世界規模で同じ価値観をも  
つことができる。

ウ 空間的に近接している他者との関係に煩うことなく、趣向を共有す  
る者同士が関係を深められるようになることで、世界規模で多様な価  
値観を保障することができる。

エ 大量の情報処理が技術的に可能となることによって、物質的制約か  
ら解放されるようになるため、世界中のあらゆる個人が仮想空間に自  
分の居場所を求めることができる。

〔問6〕〔人間の野蛮化〕の具体例として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 展覧会で見た絵の解釈について弟と意見が合わなかったので、解釈の一致をはかるために激しく意見を戦わせた。

イ 部活の大会でミスをした友人が同じ失敗によってつらい思いをしな  
いで済むように、強い口調で改善点を指摘した。

ウ 環境問題には人一倍真剣に取り組んできた自負があるため、ゴミの  
分別ができていない人を見ると厳しく非難せずにはいられない。

エ 周囲のみんなから真面目な人だと認識されたくて、自治会のルール  
を逸脱したメンバーをみんなの前で問いただした。

〔問7〕インターネット上では自らと同じ考えを持ち、自らを安心させ  
てくれる者をいつでも容易に見つけることができる。とあるが、

このことによる弊害を述べた上で、その解決のためにどうしてい  
くべきか、あなたの考えを二百字以内で書け。なお、書き出しや  
改行の際の空欄や、や。や。「などもそれぞれ字数に数えよ。

## 5

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。( \* 印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。)

竹は一晩で最大一二〇センチ伸びた記録があるというように、「竹」の和語「タケ」の語源は、「高・長・猛・武」など、その成長力の著しさの神秘性に由来するとされる。細い竹を短く切り玉のように紐に通し神事に用いられる祭具「たかたま」(『万葉集』巻三―三七九/巻九―一七九〇)や、枕詞「さす竹の」がタケの旺盛な生育力から、皇子・大宮人などの長寿・繁栄の祝意を表す(同巻二―一六七/巻六―九五五)のは、こうした竹の呪性・霊性を示す一例であろう。

「竹」の万葉仮名表記を「多気乃波也之爾(竹の林に)」(同巻五―八二四)のように「多気」とするのは中国文化になじんだ知識人の漢字の遊びでもあるが、満ちあふれる「気(天地宇宙の根源をなすパワー)」を竹の特性とみたからでもあるろうか。

竹を用いた豊富な民具や、長岡京の排水施設にも使用されたマダケの筒管など、古来、人々の日常生活空間は、身近な竹細工にあふれていたことがわかる。<sup>(1)</sup>しかしまた、その一方で、〈竹取説話〉が貧弱であったように、古典文学における竹の文学的映像は意外なほど希薄である。中国文学の中で「竹」は重視されるものの一つなのに対し、やまとことばのエッセンスを育んできた歌語(うたことば)としての竹の形象、和歌的イメージは、むしろ貧弱でさえある。

平安朝の和歌が竹を題材とする場合、「なよ竹の夜長きうへに初霜の」(『古今集』巻一八―雑下・九九三)、「呉竹の世世にも絶えず」(同巻一九―雑体・一〇〇二)のように「よ(節と節の間の円筒状の部分)」を「夜・世」、あるいは、以下のように「節」を「時節・伏し」の縁語・掛詞とする音通上の利用が大半をなす。『竹取物語』と同時代の『古今集』をのぞいてみよう。

今さらになに生ひ出づらん竹の子の 憂きふししげきよとはしらずや  
(『古今集』巻一八―雑下・九五七)

(いまさらまたどうしてこんなな生え育っているのか。竹の子はこの世がづらい折節ばかりだと知らないのだろうか)

よにふればことの葉しげき呉竹の 憂きふしごとに鶯ぞなく  
(同・九五八)

(この世に生きていると、非難や中傷にさらされて辛い目に遭うことが多く、その度にいやになって泣き嘆くことばかり)

木にもあらず草にもあらず竹のよの はしにわが身はなりぬべらなり  
(同・九五九)

(私は世間からはもの数にも入らぬ疎外された身の上になったようだ)

これらの『古今集』雑下の巻中で連続する「竹」を題材とする三首は、いずれも人生の不如意を詠むもので占められる。

<sup>(2)</sup>これに対し、『竹取物語』の作者層に属する平安前期の漢詩人たちの作例は、中国詩文のそれを規範として模倣する。この時期を代表する菅原道真や島田忠臣の詩には多くの「竹」を題材とする作品があるが、王子猷(徽之)が竹を自宅の庭に植えて「此の君」と称して愛でた小話(『世説新語』——『続日本後紀』)には、自宅の庭に好んで植樹する藤原吉野の趣味に関連して、かの王子猷が自邸に竹を植えて暮らしていた理由を尋ねられて「何ぞ一日も此の君無からんや(この君(竹)なしには生きられない)」と答えた故事を引用し、「千古なお隣ありと言うべし(昔も今も同好の士はいるものだ)」という批評文がみえる——や、竹林七賢人(隱遁)の故事、あるいは寒気きびしい冬(逆境)にも負けず青々と茂る竹の葉に「貞潔な節操」のイメージを重ねるものを基調とする。

そして、道真の「竹」詩には、竹の杖が龍となった費長房や、竹の実を食らう鳳凰とともに、竹のように常に変わらぬ貞堅なところざしが詠み

込まれる（『菅家文章』巻五）。

平安中期の文人学者もまた、「修竹（長い竹）は冬にも青し」と題する詩序の中で、「そもそも竹というものは、羅を切り揃えたような青く美しい葉、碧玉にも似た幹ゆえに、かの晋の王子猷も、特に植えて《この君》と讚えたし、唐の白居易もことさらに愛でて《我が友》とした……竹の生い茂るこの庭はまるで仙境（壺中・象外）のような楽しみに満ち、この理想郷の竹に負けない忠節な志を誓おう」という（『本朝文粹』巻一一）。

白居易の詩文集（『白氏文集』）は、承和期に移入されて以来、平安びとの絶大な支持のもと、作詩・作文の手法となったばかりでなく、広く彼らの気のきいた言語生活上の愛玩物ともなっていた。

右の詩序は、当時の王朝漢詩文のほとんどがそうであったように、白居易の数多くの「竹」を題材とする作品中の語句を利用しての作のひとつ。しかもその白居易は、「松」や「菊」よりも「竹」をこそ最も愛好するまでという。「西省の松を憶わず、南宮の菊をも憶わず。唯だ憶うは新昌堂の、蕭蕭たる北窓の竹のみ」（『思竹窓』『白氏文集』巻八）と。

白居易にとつて、竹は特別なものであった。長慶二年（八二二）、彼が五十一歳、杭州の刺史（州の長官）の時、西湖の孤山の傍らに多くの竹を植えた小閣にしばしば休息したが、その折の感興を次のように表す。「夕べに竹の繁る宿に眠れば、清虚なること仙葉を服用したかのよう、一人静かなること隠居の如く、修道せずとも悟りの境地に至るようだ」と（宿竹閣）『白氏文集』巻二〇）。

なお、竹林は、道教徒のみならず仏教徒にも宗教的な霊的空間として特別視されたというから、竹・竹林は、いずれも現世を隔絶した特殊な雰囲気をもつものと知られる。わが国で「竹を詠む」詩は、九世紀後半期の島田忠臣、菅原道真からはじまるという。

以上みてきたように、漢文世界、とりわけて神仙世界に関わって「竹」

を特別のものとする記述の多いことが注目される。

〔竹取物語〕冒頭のかぐや姫の竹中誕生の部分、いかにもおとぎ話のイコマとして古代伝承の残存と見られやすいが、不思議なことに、作品中、この冒頭場面以外に竹が再び登場することはないし、竹が物語を推進するモチーフとして機能することもない。しかも「竹」に関する平安文学の世界でのイメージは決して豊富なものではなく、むしろわれわれの期待を裏切るほどに希薄でさえある。このようにみると、竹中出現を主人公誕生の重要なモチーフとして採用するには、より大きな別のインパクトがあったと考えなければならぬ。

当時の第一級の知識人である作者の価値観からすれば、野卑で通俗的な古来の伝承をそのまま記録するはずはない（現代の民話学のように、原話を忠実に録音するように採取することには価値観を抱くことはなかった）。そこには、より積極的な新たな意味合いを見出していること、すなわち、中国渡来の神仙小説類から触発された「竹」のもつ強力な価値（イメージ）を抜きにしては考えにくいのではなからうか。「竹」といえば仙境・仙人・崑崙山等が直接イメージされるものであったから、仙女の誕生を竹の中からとするのはまことに適切な選択であった。

わが国在来のハチク・クレタケ等を中心に、実用性に富み、身近にありふれたものとして存在していた「竹」は、神仙小説類を耽読する知識人により、その日常的な風貌を一新して、神仙世界と密接に関わるイメージに転換・更新されて登場してきたというのが実情であろう。むろんそこには、漢語「竹」の訓である、和名「タケ」の呼称の由来であった呪力・霊力を古来より保存していたことが、新来の神仙世界の「竹」のイメージを重ねやすかったこともある。

言い方をかえれば、古来必ずしも明示的には現れにくかった竹の霊性は、新たな神仙譚の乗り物を得て、あらためてより強力な呪性を発見的に付与されたということなのであろう。文化の移入・摂取は、常に習合的な

ものである。<sup>(5)</sup> 受け手側に受け入れる素地(の自覚)があつて初めて、摂取・受容されるのである。

(渡辺秀夫「かぐや姫と浦島」による)

〔注〕大宮人——宮中に仕える人。

長岡京——七八四年から十年間、現在の京都府に置かれた都。

マダケ——竹の種類。

歌語——和歌などを詠む時に用いられる言葉や表現。

古今集——古今和歌集。

縁語——修辞法の一つ。和歌などで、一つの言葉に意味上縁の

ある言葉を使って表現におもしろみをだすこと。また、

その言葉。

島田忠臣——平安時代前期の貴族。詩人。

王子猷(徽之)——中国の文人。

続日本後紀——平安時代前期の歴史書。

藤原吉野——平安時代前期の貴族。

竹林七賢人——三世紀ごろ中国において、世俗を離れて哲学論

議を楽しんだ七人の知識人。

費長房——中国の仏教学者。

詩序——漢詩や漢詩集につける、その書に関したことを書く文章。

羅——美しい織り物。

碧玉——寶石の一種。

白居易——中国の詩人。

壺中・象外——「壺中」も「象外」も「仙境」と同じ意味の語。

中国の故事による表現。

承和期——八三四年から八四八年。

杭州——中国の都市。

西湖——杭州にある湖。

孤山——西湖の中にある島。

道教——中国固有の宗教。

崑崙山——中国の西方にあると考えられた霊山。不死の仙女西

王母の住む所とされた。

ハチク・クレタケ——それぞれ竹の種類。

譚——話。物語。



〔問1〕<sup>(1)</sup> しかしまた、その一方で、〈竹取説話〉が貧弱であったように、

古典文学における竹の文学的映像は意外なほど希薄である。とあるが、どのようなことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 日本人は生活に根付いたものとして竹を活用してきたにもかかわらず、平安期の和歌において「竹」は、靈性や呪性という虚構を構築するためだけのものであったということ。

イ 日本人は神聖な祭具として竹を用いていたにもかかわらず、平安期の和歌において「竹」は、人生を嘆く人間を見放す世間の象徴としてしか扱われていなかったということ。

ウ 日本人は竹の満ちあふれる力に自覚的であったにもかかわらず、平安期の和歌において「竹」は、竹自体の形質的な特性による価値しか見いだされていなかったということ。

エ 日本人は古くから竹に親しんできたにもかかわらず、平安期の和歌において「竹」は、関連の深い語の音を用いた修辭にばかり使われるだけの存在であったということ。

〔問2〕<sup>(2)</sup> これに対し、『竹取物語』の作者層に属する平安前期の漢詩人

たちの作例は、中国詩文のそれを規範として模倣する。とあるが、どのようなことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 平安前期の漢詩人たちの「竹」を題材とする作品には、中国における竹に関連した小話や故事などに基づいた「竹」のイメージが取り入れられたということ。

イ 平安前期の漢詩人たちの「竹」を題材とする作品には、中国の「千古なお隣あり」という批評などに基づいた「竹」のイメージが流用されたということ。

ウ 平安前期の漢詩人たちの「竹」を題材とする作品には、「松」や「菊」より高尚だという中国の通俗的な伝承などに基づいた「竹」のイメージが援用されたということ。

エ 平安前期の漢詩人たちの「竹」を題材とする作品には、中国渡来の神仙小説類を愛読する知識人の世界観などに基づいた「竹」のイメージが写しとられたということ。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 服用とあるがこの意味の「服」が用いられている言葉として最も適切なものを、次のうちから選べ。

- ア 衣服
- イ 感服
- ウ 内服
- エ 征服

〔問4〕<sup>(4)</sup> 『竹取物語』冒頭のかぐや姫の竹中誕生の部分は、いかにもおとぎ話の一コマとして古代伝承の残存と見られやすいが、不思議

なこと、作品中、この冒頭場面以外に竹が再び登場することはなく、竹が物語を推進するモチーフとして機能することもない。とあるが、『竹取物語』において「竹」が果たした役割の説明として最も適切なものを、次のうちから選べ。

- ア かぐや姫という現世と隔絶した仙界の女性の存在を身近で日常的なものにしている。
- イ かぐや姫という現世と隔絶した仙界の女性の誕生の場面を鮮やかに写実的なものにしていく。
- ウ かぐや姫という現世と隔絶した仙界の女性が随所で竹の力に頼る状況を現実的なものにしていく。
- エ かぐや姫という現世と隔絶した仙界の女性が誕生したことを印象的なものにしていく。

〔問5〕<sup>(5)</sup> 次の発言は、受け手側に受け入れる素地（の自覚）があつて初めて、撰取・受容されるのである。本文の内容を正しく踏まえての発言として最も適切なものを、次のうちから選べ。

ア 日本人は、白居易の竹を題材とした詩などを読んでいたよね。それだから、他国の文化を受け入れるという力がつちかわれていて、中国文化から学んで日本文化を發展させることができたということでは述べているんだと思うよ。

イ 日本人は、万葉の時代から竹に満ちあふれる力を見いだしてきたんだね。それで、神仙と密接に関わる存在だという、中国における竹のイメージを受け入れることができたということでは述べているんだと思うよ。

ウ 日本人は、長岡京にも見られるように、昔から竹を身近なものとして生活空間の中で用いていたよね。それは、中国から来た竹のイメージを日本文化に取り入れることができたからだというところでは述べているんだと思うよ。

エ 日本人は、平安時代、竹を題材とする和歌を作っていて、竹を文学に取り入れることができていたんだね。それゆえ、中国文学における竹の扱い方をすぐに理解することができたということでは述べているんだと思うよ。

6  
1

1

五  
1